

金原明善の『偉人』化と近代日本社会

—— 顕彰の背景とその受容 ——

伴野 文亮

はじめに

まずは次の歌を聴いて欲しい。

- 一、あふれ出づれば田も畑も、家も人馬も流しける、
実に恐ろしき天龍の水を治めし人や誰
- 二、荒れし山地をきり拓き、植えて育てし杉・松、
緑の林美しく、国の富をば茂らせぬ
- 三、粗衣に、粗食に、甘んじて、勉め励みつ人の為、
世の為、たゞに尽くしたる偉人金原明善翁。

この歌は、『静岡縣郷土唱歌』という書物に収められて

いる歌の一つである。⁵⁾ この『静岡縣郷土唱歌』は、一九三六（昭和一一）年に静岡県教育会が作成したものである。その「緒言」をみると、「我が郷土教育の徹底を期し、併せて音楽教育の進運に寄与せんがため」とあり、これが郷土教育と音楽教育の推進を企図して編集された書物であるということが分かる。

歌詞に注目してみると、質素儉約に努めながら天龍川の治水と植林事業を行った金原明善という人物は、世のため人のために尽くした「偉人」であることが明確に述べられている。どうやらこの歌は、金原明善という人物を「偉人」として称揚する意味合いを含んでいるらしい。

金原明善という人物がいかなる人物であるかについて、は後ほど触れるが、ともかく彼は、戦前の修身科の教科

書である『高等小学修身書』巻一・巻二にも、それぞれ「質素」と「公益世務」を体現した具体的な事例として登場する²⁾。戦前の学校教育のなかで、金原明善は教材としてしばしばその姿を見せていた。

これらのことは、金原明善が「偉人」として位置付けられたうえで、国家による愛国心教育のなかで子どもたちの目指すべき対象として措定されていたことを意味する。そこには、「偉人」を創出することによって人びとの心を掌握しようとする国家、あるいは地方行政の政治的恣意性をみて取ることが出来るといえよう。そこにこそ、「偉人」を介した国家によるイデオロギー注入の危うさがある。戦前における修身科の授業への回帰を目指して

声高に叫ばれる昨今の道徳教育再編の動きのなかで、「郷土の偉人」や「郷土の歴史」を題材にして郷土愛を育み、ひいては愛国心の涵養が図られようとしているいま、改めて「偉人」顕彰の危うさについて検討する必要がある³⁾。

近年の歴史研究において、郷土愛と愛国心との関係性を解明したのは高木博志氏である。高木氏は、世紀転換期になされた地域における「旧藩」の顕彰が、愛国心の醸成を喚起する役割を果たしたことを明らかにした⁴⁾。ま

た高田祐介氏は、勤皇の志士である「殉難志士」たちの顕彰に着目し、国家・地域双方の政治動向に目配せをしながら、明治維新をめぐる歴史意識形成の構造について明らかにしている⁵⁾。この他にも、「偉人」顕彰に関して、

いわゆる「南朝の忠臣」である楠正成や新田義貞といった武将たちの顕彰の様子や⁶⁾、あるいは近代における対外戦争の戦死者を「偉人」として称揚する構造を解明するなど⁷⁾、多くの成果が積み重ねられてきた。しかしながらこれらの諸研究は往々にして、暗黙裡に「偉人」とは「死者」であることを前提としている点で問題を孕んでいると思われる。本稿において明らかにするように、存命中に「偉人」として位置付けられる人物もおり、顕彰されるのは必ずしも「死者」に限らない。本稿では、金原明善の「偉人」化のプロセスを解明し、近代社会における「偉人」を巡る人びとの意識の在り様を明らかにしたい。

具体的な事例の検討に入る前に、金原明善の人となりについて簡単に触れておきたい。金原明善は、一八三二（天保三）年に遠江国長上郡安間村に誕生し、一九二三（大正一二）年に東京で没した人物である。浜松藩時代は安間村の名主役を務め、明治維新後は区長を務めるな

ど地方名望家として活躍した。一八七五（明治八）年に天龍川の治水事業を行うべく「治河協力社」を起業、その後も瀬尻山（浜松市天竜区）や天城山（伊豆市）の植林事業や銀行経営、運輸業など様々な事業を展開した「実業家」である⁹⁵。

以上を踏まえて、早速本題に入っていこう。

一 金原明善像の展開

まずは次の史料を見て欲しい。

金原明善君

勤王無二の厳父に薰陶せられ忠君愛国の性を養成し、殖産興業に熱心して且つ常に公益を図るに汲々たる者ハ誰ぞと問ハ、皆先づ金原明善君に屈す、世に一家の資産を増さんとして実業に勉励する者ハ甚だ少きにあらず、国家の為を図りて志を實業に立つる者ハ固に多からず、金原明善君の如きハ稀に見る所なり、（中略）君ハ常に粗悪なる綿服を着して絹布を着ず、其履物ハ麻裏草履を履き或ハ厚朴下駄を

穿くを常として、豊附の履物などハ一度も穿きたることなしと云ふ、嗚呼誠に志を立つる者ハ毫も毀誉を思はず故に名利を外にし志を内に存する者ハ求めて外を飾らず、故に粗悪の綿服を着し厚朴下駄を穿き美服を着し舶来靴を穿きたる者と共に立て愧りざるなり、君の如きハ真に間然すべからざるの立志家なり

これは、一八八二（明治二五）年に刊行された『実業立志 日本新豪傑伝』という書物において、明善について書かれた部分である⁹⁶。ここで明善は「忠君愛国」の精神をもち、単に「一家の資産を増やさん」とする利己的な動機ではなく「国家の為」に「殖産興業に熱心」な、「実業」家のなかでも「稀に見る」人物として描かれている。その内容を見てみると、明善は「国を愛する其基ハ先づ国を富ますにあれば我れハ殖産興業をもて其手段となさばや」と決心して「養蚕製糸の業」を興した。また事業の支障となる天龍川の被害を食い止めるべく、自家の財産を政府に献納して河川の改修を嘆願したり当時の内務卿大久保利通に直接工事の着工を迫るなどして治水事業

を推進し、その結果改修工事は完了して「沿岸の農民八多年の害を免れて君の恵みに感じ」るようになったという。こうした明善は「公共の事に費して功績の見え」るために、勅定によって藍綬褒章を与えられてその善行を表彰された。その後「栽桑の業も目的を達し」た明善は、「東京に出て、田所町に為替店を開き汎く実業家の為に便利を図るに注意して其業を怠らず」、また一八八七（明治二十二）年には京橋区霊岸島に東里組という「商社」を設立して八丈島の人々の期待に応えた。さらに明善は、一八八五（明治二十）年に「父の勤王の遺志を継」いで海防費として二万円を宮内省に献納し、その褒賞として従五位に叙せられようとしたところ、明善は涙を流しながら天皇の恩恵に感謝しつつも、自身の行為は唯亡き父の遺志を継いで少しばかり「国民の本分」を尽くしただけなので位階の下賜は畏れ多いとして、位階返上を宮内大臣に訴えてこれを固辞したことをあげる。そして最後に、明善が「常に粗悪なる綿服を着して絹布を着ず其履物ハ麻裏草履を履き或ハ厚朴下駄を穿くを常として豊附の履物などハ一度も穿きたることなし」として常に質素儉約に努めていたことに触れ、「誠に志を立つる者ハ毫も

毀誉を思はず」というその姿は「美服を着し舶来靴を穿きたる者」と並んでもなら恥じることはなく、そんな明善は欠点のない「立志家」であると述べてその項を結んでいる。ここからは明善が行った事業の内容と、事業の目的が自身の名譽獲得や利潤追求では無くあくまで「公益」の増進をはかることであつたとされている様子が見て取れる。

こうした論調は他の書物にもみられる。例えば一九〇一（明治三十四）年に刊行された『商海立志 明治豪商苦心談』のなかで⁽⁹⁾、明善は次のように描かれている。

金原明善

事に当りて精励勤儉着実で有り且辺幅を飾らないで、実に実業家の人傑として、後進の士を欽仰せしむるに足るべき者は、世又多しとはせないのである、金原氏の如きは即ち其一人で有る、君は国家的実業に従事した人で有る、君は真に己人的利益を後にして国家的利益を先にしたる者である、蓋し此の如きは口に言ふべくして行ひ難き事である、君は克く之を實地に踏みたる人として賞揚せん⁽¹⁰⁾ければならん

ので有る、(後略)

明善は、何事にも積極的に取り組み、且つ勤勉で儉約に努める優れた「実業家」であるという。と同時に、後進の人びとに尊敬されるべき数少ない人物の一人として位置付けられている。明善の如何なる点が尊敬すべきかについて、明善が国家的事業に従事し、個人の利益を後にして国家の利益を優先させた人物である点に求められている。明善のように、個人の利益より国家の利益を優先させることは口には出来ても実際に行うのは難しいことであるとして、困難なことを体現させた明善を称揚しなければならぬ、という。文末では、明善を本書に掲載した意図について、「宜しく後進の士をして君の素行に習しめ以て君の如く偉大ならんことを切望する所以に外はない」と述べ、明善を「後進の士」の模範的存在として取り上げた旨を明確にしている。

ここにみられる作者の意図は何だろうか。それは、明善を「実業家」の模範的人物と捉えたうえで、個人の利益(私益)よりも国家的利益(国益)を優先して事業を展開した人物として描き、それを称揚することである、

と判断出来る。この史料からは、明善を「偉人」として位置付け、積極的に称揚しようとする意識のあり様を見て取れるといえよう。

しかしながらこの段階では、明善はまだ複数いる「実業家の人傑として、後進の士を欽仰せしむるに足るべき者」の一人にすぎない。現にこの書物では明善以外にも、渋沢栄一や大倉喜八郎といった著名な実業家が二五人も載せられている。

そもそも、著者の本書執筆の動機は、その序文にあるように「現世に於ける実業家として知られたる者の事蹟を蒐集して。之を社会に表彰し。後進の士をして靡然其風に慕へ。以て立志修身の龜鑑となし。普く斯道の発達を希図せしめんとするにあり」というものであった。すなわち、異なる生い立ちを持った複数の「実業家」を紹介することによって普遍性を担保しつつ、「後進の士」の立身出世願望を刺激し、「斯道」すなわち「実業」界の発達を促すことが著者の究極的な目的であった。この書物の主題は、明善一人を「偉人」として称揚することではない。ここでの明善は、あくまで「後進の士」の立身出世願望を刺激するための、モデルケースの一人でしか

いのである。

こうした論調は、日露戦争が勃発する頃から徐々に変化し、地方改良運動が展開され始めた頃からその変化は決定的なものとなる。一例を挙げれば、次のようなものである。

自序

夫れ世に名を挙げ産を積む、人誰れか欲せざる者あらんや、之れを欲して而して克く其目的を達する者古今東西頗る稀れなり。況んや徒手空拳敢て父祖の偉財あるにあらず、又何等先輩の後援なくして、一代に鉅萬の富を致し、徳聲治く世人の畏敬推重を垂るゝに至つては、決して常人の業にあらざるなり。

明治昭代偉人傑物を出す少なからずと雖も、彼等の多くは父祖の餘慶を享け、若くは先輩大家の指導援助に依りて初めて其地位を得たる者、其間何等の波瀾なく屈折なく、吾人をして其の功績を賞揚し、其致風成功の秘訣を味はしめ、立身処世の教訓を解するに値せざるを如何せん。

茲に於てか著者は、現代豪商にして徒手空拳より

起りて、千難萬艱と闘ひ、流離困憊の状に鑑み、機智妙略を縦横に振ふて、克己精力の権化となり、遂に事業を奏功して鉅萬の富を致し、芳名を千載に垂るゝに至りたる偉人傑物の経歴逸話を蒐め、以て実業青年が立身処世の教訓たらしめんとす。若し夫れ本書を読まば、彼れ偉人の面影は躍活たるべく、致富成功の秘訣と精神修養に資する處大なるべきを聊か序となす。

岩崎錦城識

これは、『明治豪商苦心談』と同様、「実業青年」たちに「致富成功の秘訣」を示すために、渋沢栄一や安田善次郎といった「現代豪商」⁽¹⁾「偉人傑物」の経歴を蒐集・叙述し、一九一一年（明治四四）年に刊行された『此奮闘』という書物における作者の「自序」である。そこで作者の岩崎錦城は、本書を読むことによつて「青年」たちは、「偉人傑物」たちの「致富成功の秘訣」を知ると同時に精神修養を行うことが出来ると述べている。ここでは「成功」と「修養」が混在し、まさに“癒し”としての「修養」主義が存在していることが読み取れよう⁽²⁾。

こうした論調はさらに、大正期になると一層国家主義的色彩を帯びていく。例えば『偉人成功史』という本なかで、明治天皇を筆頭にして和氣清麻呂や日蓮、徳川家康や二宮尊徳といった日本史の人物、さらにはピスマルクや孔子といった外国史上の人物をも含めた「偉人」の紹介を行った秋田実は、明善を「国家に忠節、同胞に仁慈なる者、未だ曾て見聞せざるところである、金原明善君之なり」と評し、明善を国家に忠節を尽くすと同時に「同胞」にも仁慈に富んだ稀有な人物として捉えている。⁽¹²⁾あるいは富田文雄は、農業振興の必要性を訴えた『三太郎の鼻唄』という書物のなかで、明善の事蹟を縷々述べたあと次のように記している。⁽¹³⁾

(前略) 翁の逸話は他にもたくさんあるが、此位にとどめて置く。世にはずる分勤儉貯蓄にかけては明善翁以上のが澤山ある、然かし彼等のためこんだ黄金は一向光らぬ、尿尿にも劣つてゐる、それは何故か、彼等のためこんだ金によりてうるほふ者は他に一人もないからだ。

我が明善翁は他人を救ふがために自らを節するので

ある、自分の股をさいて他人の飢を救ふということば、神様でなければ出来ないことだ。

ここで富田は、明善以上に勤儉貯蓄に成功している人々がいることを指摘したうえで、「彼等」が貯めた金品は尿尿にも劣ると断言する。その理由は、「彼等」が貯めた金品によつて潤う人は誰一人としていないからだということにおける「彼等」が誰を示しているかは判然としないうが、恐らく第一次世界大戦によつて財を成した「成金」を含む都市部の富豪たちと考へて良いだろう。一方の明善については、他人を救うことを目的として節約に励んでいると、対照的な位置づけがなされていることが分かる。明善のように「自分の股をさいて他人の飢を救ふ」ということは、神様でなければ出来ないことだ」と断言する。ここにきて明善は、「神様」と同列に位置付けられるようになったのである。

こうした論調の変化には、固有の時局認識が存在した。先述の秋田は『偉人成功史』のなかで、「今や世界は恐しい動乱の渦中に捲込まれて」おり、ことに日本では「上を下国を挙げて国民は漸く戦勝の餘榮に酔ひ、日増浮華文

弱に流れ実に寒心に堪えない」とし、「これ寔に国家の大憂事にして、社会の一恨事である」という危機意識を表明していた。実際秋田のいうように、当時の日本社会は、日清・日露戦争後の経済発展に伴う格差社会の進行と自由主義思想、及び社会主義思想の普及がみられ、それと同時にいわゆる「高等遊民」問題が発生するなど、国家主義を標榜する人びとにとって、危険な、秋田の言葉を借りればまさしく「大憂事」の状況にあった。こうした状況を改善すべく、彼らはメディア上において積極的に自らの思想を展開した。明善は、そうした国家主義者たちの危機意識に導かれながらメディア上に登場させられていたのである。彼らにとって明善は、自らの思想を開陳する際に適切な存在(具体的事例)だった。ところで、こうした情勢下のなかで、当時の「青年」たちは社会から特に注目されていた。かつてみられたような立身出世の機会が徐々に減少していくなかで、「高等遊民」や「煩悶青年」というレッテルが「青年」たちに貼られるようになったとき、様々なメディアが「青年」たちを読者として出版されるようになったことは、まさにそのことを示している¹⁴⁾。こうした風潮のなかで、明善

が「青年」たちにとっての「模範的存在」としてメディア上に登場していた点は押さえておくべきであろう。明善が経済的な「成功」と同時に「修養」の模範として捉えられる様子は、すでにみた通りである。また表①をみると、明治三〇年代以降に出版された明善について触れた書物のうち、タイトル中に「青年」と記されたものが複数散見される。このことから、当時明善が「青年」たちと向き合う形でメディア上にその姿を見せていたと判断することが出来よう。これらのことから、明善は地方改良運動を画期として、主に「青年」たちに対する「修養の模範」として表象されるようになったと判断して良いだろう。

だが、明善を捉える視線は、必ずしも明善を「修養の模範」と位置付けるものだけに止まらない。民力涵養運動を経て元号が昭和に変わる頃から新たな局面を迎える。次の史料から、その様子をみてみよう。

金原明善

金原明善は、天保三年遠江国浜名郡和田村久右衛門軌忠の長男に生る。至誠一貫、勤儉力行、身を持す

表1 金原明善に関する書物一覧

西暦	和暦	静岡県外で発行された書籍	静岡県内で発行された書籍
1879	明治11	『金原明善小伝』(『郵報』304)	
1884	明治17		『静岡県名士列伝』
1891	明治24		『島陽名士伝』
1892	明治25	『日本新豪傑伝』	
1900	明治33	『実業家奇聞録』	
1901	明治34	『合名会社金原銀行』(『実業評論』(13号))	『岳陽評議』
1903	明治36	『商海立志 明治家商苦心談』	
1905	明治38	『立身資料 人物と長所』	
1906	明治39	『立身教養信用公録』(第5編)	
1907	明治40	『勤徳と徳約 金原明善の性行』(『農業雑誌』(915号))	
1910	明治43	『勤徳と徳約 金原明善の性行(前号の続)』(『農業雑誌』(916号))	
1911	明治44	『処世の心得(上)』(『農業雑誌』(917号))	
1913	大正2	『処世の心得(下)』(『農業雑誌』(918号))	
1914	大正3	『金と業と名客』(『農業雑誌』(957号))	
1915	大正4	『講談 金原明善』(『農業世界』(第8巻第1号))	
1916	大正5	『当代の傑物』	
1918	大正7	『明治十一年金原明善翁家産献納票讀書』	
1919	大正8	『金原明善翁』	
1920	大正9	『金原明善翁と免囚保護』(『人道』(69号))	
1922	大正11	『此實蹟 明治豪傑立志百話』	
1923	大正12	『北海道農場調査』	『金原明善と其事業』
1924	大正13	『天龍翁別語』	『和田村誌』
1926	大正15	『公共事業の偉勳金原明善翁(上)』(『日本青年』(3巻4号))	『東海三州の人物』
1928	昭和3	『公共事業の偉勳金原明善翁(中)』(『日本青年』(3巻5月号))	
1929	昭和4	『公共事業の偉勳金原明善翁(下)』(『日本青年』(3巻6月号))	
1930	昭和5	『精神修養 偉人成功史』	
1931	昭和6	『金原明善翁』(『実力世界』(7巻3号))	
1932	昭和7	『金原明善翁の一話』(『上野教育』(346号))	
1933	昭和8	『天龍翁金原明善』	
1934	昭和9	『大正の農村青年に告ぐ』	
1935	昭和10	『三太郎の鼻鳴』	
1936	昭和11	『現代の碩徳金原明善翁(1)』(『工業界』(10巻5号))	
1937	昭和12	『現代の碩徳金原明善翁(2)』(『工業界』(10巻6号))	
1938	昭和13	『民力涵養 農村青年の為に』	
1939	昭和14	『本奥都之林業』	
1940	昭和15	『優良別語選』	
1941	昭和16	『金原明善翁の思ひ出で』(『人道』(210号))	
1942	昭和17	『金原明善翁略伝』	『静岡県人物誌』
1943	昭和18	『故金原明善翁の遺業 天龍運輸株式会社の沿革』	『浜名郡誌』
1944	昭和19	『修業全集 東西感動美談集』2	
		『家庭実話 教育勸話読本』	
		『此の人を見よ』	
		『職業指導 人となる道』	
		『理想郷の建設と百姓大鬧』	
		『金原明善翁(感謝生活感の巻)』	
		『富豪伝』	『郷土偉人物誌』第二集
			『久能談本』
			『郷土教育資料』第1集
			『少年物語 金原明善』
		『看板に偽りなし 金原明善翁の風格』(『日曜朝報』(174号))	
		『野人野話』	
		『片平信明翁 金原明善翁』	
		『明治百傑略伝』	
		『明善翁の経歴と本領』	
		『規範たるべき農村青年の針路』	
			『金原明善翁と其思想』
			『西遠江人物誌』
		『天龍翁金原明善(1)-治水編(上)-』(『農政』(第3年6号))	
		『天龍翁金原明善(2)-治水編(下)-』(『農政』(第3年6号))	
		『天龍翁金原明善(3)-植林編(上)-』(『農政』(第3年8号))	
		『天龍翁金原明善(4)-植林編(下)-』(『農政』(第3年9号))	
		『天龍翁金原明善(5)-社会編(上)-』(『農政』(第3巻10号))	
		『天龍翁金原明善(6)-社会編(中)-』(『農政』(第3巻11号))	
		『近世篤農伝』	『金原明善の言葉』
		『教典』	
		『あの人この人』	
		『青少年練成の書』	『金原明善翁の遺私孝公』
		『金原明善』	
		『土の偉人 金原明善伝』	
			『金原明善翁の遺徳』
			『物語 金原明善』
	不明		

(註)筆者が入手・閲覧した金原明善関連書籍及び雑誌記事をもとに作成。

ること極めて質素にして、得たる所は公共のために費す。その平生の家訓に、実を先きにして名を後にす、行ひを先にして、言を後にす、事業を重んじて身を軽んずとある如く、独立独行、為すことは国家公共あるを知りて私あるを知らず、廣大なる植林をなしては縣基本金に寄付し、北海道の開拓をなしては窮民を移住せしめて賑はし、その他村政の改善、出獄人の保護、廃家の復興、銀行の整理、特に天龍川の年々氾濫して沿岸耕地の荒廢夥しきを見て奮起し、賞局を責め、地方民を督励し、遂に明治十二年、その促進のため、祖先伝来の田畑山林、家財器具悉く売却して、当時に於ける巨金たる六萬圓を得、之を堤防費中に献金したるが如きは、類例全く絶へたるの大功績である。此の事天聴に達し、畏くも無位の身を以て夫妻共に拜謁を賜ふに至つた。後従四位勲三等に叙せられ、藍綬褒章を下賜された。大正十二年九十二歳卒、第二の尊徳と称せらるゝ程、稀なる公共的世務的偉人であつた。

これは『家庭実践教育勅語読本』の、明善の項である。⁽¹⁵⁾

ここでは、明善は、極めて誠実で勤儉力行の精神に富み、身持ちは質素にして自分が得たものは公共のために費やした人物であるとされていることが分かる。そして明善が作成した「家訓」について触れたあと、明善の行動は独立独行のもので、常に自己を顧みず国家公共のためになされたものであつたと位置付けられている。そのあと明善が行つた事業の数々と、他に類例が全くない「大功績」という天龍川の治水に関わる「家産献納の美談」を述べたところで、明善が第二の尊徳と呼ばれる程の稀有な公共的かつ世務的な偉人であると評価されている。注目すべきことには、明善を二宮尊徳と比較しながら評価している。近代日本社会、特に地方改良運動が展開されて以降、尊徳が中央報徳会系の内務省官僚たちの手によつて近代社会に適合する形で称揚されたという事実は、既に先行研究の指摘するところであるが⁽¹⁶⁾、ここでは明善も尊徳同様、その「公共性」の高さを以て称揚されていることが分かる。もつとも、明善を尊徳と重ねて捉える傾向は以前から存在していた。だがここでは、それらとは質的に異なる位置づけがなされている。では、尊徳と比較して明善を位置付けつつ、これまでにはみられな

った最大の相違点とは一体何か。それは、本史料において、明善が「公共的世務的偉人」として位置付けられている点である。

そもそも、これまでみてきた明善に対する評価のなかで、「公共」という語句を冠した表現はしばしば目にしてきた。しかしその一方で、「世務」という表現は一度も確認していない。この「世務」という語句は、一体如何なる性質を帯びているのであろうか。そしてこの段階において、「公共的世務的偉人」という表現が突如として登場したのは何ゆえであらうか。

この謎を解く手がかりを探るべく、この本の作者の意識を確認してみよう。著者である堂屋敷竹次郎は、「凡例」において「本書は、教育勅語の真精神を最も簡明に、最も直截に一般国民に徹底せしめ、且つ日々拝誦玩味の便あらしむるため」⁽¹⁷⁾のものであると述べている。つまるところこの書物は、教育勅語の真髓を簡潔かつ明確に国民に浸透させるために作成されたものであると判断できよう。また堂屋敷は、本書の「勅語をいかにして実践せしむるか」という目的を達成するために、「勅語の含有せる諸徳目に対し、感銘深き実例、並びに訓言、詩歌、諷刺、

標語等」を選定し、読者が教育勅語の内容を理解しやすいようにしている。堂屋敷の熱意が感じられて興味深いのが、要するにこの書物は、教育勅語の「諸徳目」に適合的な人物や事例を当てはめて読者に提示されたものなのである。したがって、今回明善に付せられた「公共的世務的偉人」における「公共」ないし「世務」とは、教育勅語における「公共」と「世務」であることが分かる。

作者によれば「世務」とは、「すべて世のため人のために、實際的に利益ある事業を起す」⁽¹⁸⁾ことであるという。であれば、堂屋敷が明善を「世務」を体現した「実例」として位置付けていることはすなわち、明善を「世のため人のためとなる実利的な事業を起こした人物」として認めると同時に、明善が「明治大帝」の「聖旨」に則って「世務」を体現した人物として捉えていると判断できよう。この史料における明善の「偉人」たる所以は、まさしくその点にあると考えられる。明善は昭和に入った頃から、「明治大帝」の「聖旨」に満ちた教育勅語の説く「臣民の道」を体現した模範的存在として捉えられるに至ったのである⁽¹⁹⁾。

こうして明善は、昭和期に入ってその存在を教育勅語

と結ばれることによって、より直接的に天皇制国家の政治支配を支える役割を担わされるようになった。だが、当該期における明善を捉える視線は、必ずしも教育勅語と結ばれるばかりではない。この点について、次の史料を見てほしい。

（前略）質素儉約を重んじ、勤労を尚び、物を大切にし、実践躬行を重んじた明善の生活は青年として学ぶべきことが多い。此の頃の青年で服装を気にし、安秩を求め、骨の折れることを避けようとする人はいないであらうか。人間の行は実践があつて価値があり、躬行があつて意味があるのである。特に非常時局下に於ては、率先して実行することが極めて大切なのである。

（国家の為、公共の為に一家一身を捧げ、率先して所信を貫いた勇氣と信念とに注意して欲しい。）

冒頭部分において、明善は、やはり質素儉約を重視して勤労を厭わない通俗的な人物として描かれている。「実践躬行」という実行主義を尊重する明善は、服装を気に

し労働を忌避するなど、総じて自己本位な存在である「青年」と対比されている様子が窺える。ここまでは、これまでみてきた明善を捉える論調とさほど変わりはない。注目すべきは次の部分である。ここでは、人間の行いをなす上で実践と躬行は不可欠の要素であり、ことに非常時局における日本社会では、率先して国家や公共のために行動することが大切である、と説かれる。言い換えればそれは、国家や公共のためには一家一身を顧みることなく、勇氣と信念を持つて率先して行動すべきであると訴えるものであつた。

これは『青少年錬成の書』という書籍のなかで、明善について書かれた箇所最後の部分である³⁰⁾。明善は、勤儉に努めて実践主義を尊重した人物として称揚された上で、自己本位になりがちな「青年」たちにとつて学ぶべきところが多々ある人物として位置づけられていることが読み取れる。明善はここでも「青年」たちの模範的存在として捉えられているのである。しかもここではこれまでのように、「青年」たちに対して単に精神修養を促す存在ではない。そこにみられる著者の意図は、戦争という「非常時局下」において、「青年」たちに現実的な国家

への貢献を要求するものであった。アジア・太平洋戦争のさなか、明善は国家・公共のために率先して一身を捧げる、自己犠牲の精神に富んだ人物として位置付けられるに至ったのである。

ところで、こうして形成された「偉人」としての明善を、当時の人びとはどのように受け止めていたのであるか。次節では、三つの書物に分析対象を絞って、明善が人びとにどの様に受容されていたのかを検討してみたい。なおその際、書物の作成主体の意識も併せて検討することとする。

二 「金原明善」の受容

本節では、特定の書物を事例として、①作成主体が如何なる目的でその書物を作成・刊行したかという作成主体の意識と、②その書物を読んだ人びとが如何なる意識を形成したのかという受容者の意識の、大きく分けて二つの意識を検討する。

① 『天竜翁金原明善』の場合

まず取り上げるのは、『天竜翁金原明善』という書物である。この書物は、水野定治という人物によって一九一六（大正五）年に刊行されたもので、総ページ数は三〇六頁である。著者の水野という人物については、該当の書物の表紙に「門弟水野定治著」とあることや、別の著作のなかで水野自身が明善を「修養の師」と仰いでいたと述べていることから⁽²¹⁾、明善の門人であったことが分かる。つまりこの書物は、明善の門人たる立場にある人物によって作成されたものということになる。この書物は戦後を含め、これ以降に出版・刊行される書物に大きな影響を与える位置を占めた⁽²²⁾。

以上を確認したところで、さつそく本題に入ろう。手始めに、著者である水野がどの様に明善を捉えているのかを確認しておこう。次の史料は、『天竜翁金原明善』における「例言」の一部である。

一金原明善翁は近代の偉人にして「生きた神」若しくは「今尊徳」と称せられ、其の言其の行は皆いて人を戒むるに足る。

一本書は世道人心の振興に資する目的を以て、翁の小傳・事蹟・訓話及び逸事等を記述したるものなり。

一又巻末には、翁一代の重要事歴を最も簡明に表記し、更に翁に対する名士の感想を掲げたり。

一著者は翁に師事せること正に十有二年、本書の材料は主として此の間に得たるものなり。

一叙述は成るべく平易にして趣味多からしめ、又其の事実は努めて正確ならんことを期したり。

(中略)

一本書を編輯するに当りて、碧瑠璃園氏著「金原明善翁」及び静岡県知事官房編「金原明善と其事業」を参考し、又河合積文館主の勞を煩したること少からず。記して以て之を謝す。

大正五年九月一日

著者識す

冒頭の一文から、水野の明善観が読み取れる。すなわち、明善は近代における「偉人」であり、生き神とも、現代における二宮尊徳とも称される人物である、そんな

「偉人」たる明善の言行は人びとを戒めることが出来る程の影響がある、と。ここからは水野が、明善を「偉人」として称揚し、社会を「戒め」るために明善を紹介しようとする意図が読み取れよう。その目的は二条目にある通り、当時の社会における人々の精神性を高めることであつた。

本書の内容について、水野は、自身が明善に師事した期間に知り得たことを記したという。具体的には、明善の小伝や事蹟、訓話や逸事等だという。加えて巻末には、明善の「重要事歴」と明善に対する「名士」の感想などを収録し、それらはなるべく平易な叙述で著すよう心掛けたと水野は述べる。最後に、この書物を編集するに際しては、碧瑠璃園という人物による『金原明善翁』と、静岡県知事官房が作成した『金原明善と其事業』という二つの書物を参考にしたことが述べられている。この二つの書物については後で触れる。ここでは、明善の「門弟」である水野が、上記二つの書物を参考にしながら本書を作成したということに留意しておきたい。

こうした論理に基づいて、明善の小伝や逸話などが展開されている。ここでは、明善が幼い頃より「実践躬行」

を体現していた、あるいは年老いても「隠居仕事」として「国家公共の為に尽」す人物であるなど、明善が「偉人」と呼ばれる所以とも言うべき事柄が述べられている。

ところで水野は、時代はやや下つて一九三九（昭和一四）年に、『金原精神』という書物を著している。⁽²³⁾ 総ページ数三五四頁のこの書物の「緒言」には、次のことが記されている。

金原明善翁は、近代の偉人にして、その言その行は、みな以て人を戒むるに足る。著者は明治三十四年岐阜縣師範学校に在学中、凶らず翁の講演を聴いて大いに感ずるところあり、後、静岡縣に翁の門を叩いて教を乞うた。以来暇ある毎に翁の膝下に師事すること多年、その間翁の薫陶に浴し、翁の感化を受けて、得るところ極めて大なるものがあつた。

そこで著者は、世道人心の振興に資する目的を以て、翁の小伝、事蹟、訓話及び逸事等を記述して「天竜翁金原明善」と題し、大正五年九月これを公にした。幸ひ江湖の好評を博し、版を重ねること数次に及んだのである。

今やまさに事変下、国民精神総動員の時、同書が一冊でも多く世の人たちに誦読せられんことを切望するのであるが、如何せん、同書は彼の大震災のため紙型消失、爾来絶版となつてゐたのである。

こゝに於て、今回改めて筆を起し、同書の内容に、その後得たところの新資料を加へて本書を著述したのである。本書はやはり翁の事蹟、訓話及び逸事等を記述したものであるが、前書とは全然編纂の形式を異にし、特に全篇を通じて翁の偉大なる精神を顕現せんことに留意した。

（中略）

素より眇乎たる小冊子に過ぎないが、幸ひ国民精神作興の上に裨益するところあらば、著者の喜びこれに如くものはないのである。

昭和十四年十月五日

上野山下にて 著者識

ここからは前書同様、明善を「近代の偉人」と捉えたうえで、明善の「偉大なる精神を顕現」させるために前

書『天竜翁金原明善』の内容を改変して本書を作成したという、出版に至る過程が具に述べられている。ここにおいて、「偉人」たる明善の言行が人々の精神性を高めるという水野の意識は、前書を出版したときから変化していない。注目すべきは、今回改めて本書を出版した水野の意図である。水野は、本書が「事変下」、すなわち日中戦争に突入して「国民精神総動員」が求められる状況下において、本書が多くの読者に読まれることによつて人々の「国民精神」を向上させたいという目的を持つていた。そのため水野は、前書の編纂形式を変更し、特に明善の「偉大なる精神」がより明らかになるように本書を編集し直したのである。ここからは当時の社会状況を意識しながら、その状況に適合するように明善のイメージを再発信する水野の姿を垣間見ることが出来る。こうして明善は、前節でみたような教育勅語の注釈書や修身科の教科書に登場することに加えて、「門弟」の手によつて総力戦体制を下支えする役割を果たすようになったのである。

ところで、これらの書物の作成に際して水野は、壁瑠璃園なる者の手による『金原明善翁』と静岡県知事官房

が編集した『金原明善と其事業』という二つの書物を参照したと述べていた。この二つの書物とは、一体如何なるものなのであろうか。次にこの二つの書物についてみていきたい。

②『金原明善と其事業』の場合

まず、『金原明善と其事業』からみていこう。この書物は、一九一三（大正二）年に静岡県知事官房が作成したものである。総ページ数は一二二頁あり、明善の幼年時代から老年時代までの伝記と、治水や植林といった明善が手掛けた事業の内容が述べられている。

ところで、静岡県知事官房という公の機関が、金原明善という一個人の伝記を刊行したのは何ゆえであらうか。この点について考えるために、当時静岡県知事を務めていた松井茂が書いた序文を読んでみよう。

序

明治年間褒章条例に依り褒賞せられたるもの、縣下其人に乏しからず。就中明善（マサキ）金原翁の事蹟の如きは、

実に異彩を放つものと云ふへし。翁今や既に八十二の高齢に達するも、尚能く壯者を凌ぐの概あり、則ち官房主事原口晃をして、備さに其事蹟を叙述せしむ。其意蓋し大正の新政に際し廣く之を世に紹介し、聊か世道人心の振興に裨補せんとするにあり。今や其稿成るを告げ將に梓に上せんとす、乃ち一言を卷首に序すと云爾。

癸丑二月中浣

静岡縣知事法学博士 松井茂誌

松井からみた明善の事蹟とは、県下にいる数多の受章者のそれとは全く異なるものであるという。かつ明善は、目下八二歳の高齢にも拘わらず活力に満ちているので、明善の事蹟を県の役人に細かく叙述させたと話す。その目的は、明善の事蹟を広く世間に紹介することによって、少しでも人びとの精神性を向上させることであると主張する。

ここからは、主に二つの事柄を指摘することが出来る。一つは、松井が明善の事蹟について、他の受章者のそれとは異なるものであるとし、明善を特別視している点で

ある。しかしながら一八九一（明治二四）年に刊行された、静岡県出身の「名士」たちを収録した『嶽陽名士伝』掲載の受章者たちをみてみると²⁴、その中には、国会議員という「公職」について名声を集めた人びとも複数散見される。にもかかわらず松井は、明善を特別視するのである。松井のなかにある、明善を特別視する論理とは、一体何なのであろうか。

それは恐らく、「世道人心の振興に裨補せん」と松井本人が言うように、明善の事蹟を公表することによって人びとの精神性を向上させることが出来ると考えていた点に求められよう。前節で確認したように、明治後期以降、国家主義を掲げる人びとは、社会における「高等遊民」の発生や「危険」思想の浸透に対応すべく、こぞつて明善を称揚した。翻つて考えてみれば、松井は、地方改良運動の推進主体である内務省系の官僚であり、彼らと同様の危機意識を抱いていたとしても何ら不思議はない。したがって、松井が明善を特別視するのは、人びとの思想を「善導」することを企図してのものであり、またそこからは、明善を用いて人びとの心を体制に帰属させようとする、行政官僚の政治的恣意を見て取ることが

出来るのである。

ここまで、松井茂の明善観について確認してきた。次にもう一つの確認事項である、本書の作成過程についてみていこう。松井によれば、本書の叙述を行ったのは「官房主事原口晃」という人物であるという。この原口が具体的にどの様な人物であるかは、現在のところ詳細は不明である。しかしながら金原家に残された史料のなかに、「静岡縣廳 原口産業課長」なる人物から明善に宛てて認められた書簡が存在している⁽²⁵⁾。

(表)

浜名郡和田村

金原明善殿

(裏)

静岡縣廳

原口産業課長

拝啓益御清榮奉賀候、陳八豫テ編述致居候貴下御事蹟今回漸ク出来、別封ニテ忝部留出候間、御高閣賜ハリ度、尚各所ヘノ配布方等ニ付テ八目下鈴木信一君トモ御相談中ニ候得は、県庁の手ニ於テ千部、内

務省方面ノ手ニテ五百部夫々配布致事ニ致度取運ビ中ニ有之候間、御含置被下度、右迄得御意候勿々、
敬具

大正二年三月二十日

原口産業課長

金原明善殿

ここからは「静岡縣廳原口産業課長」が、官房主事原口晃であることは確かである。原口は、明善の事蹟を「編述」した書物が完成した段階で、その書物を一部明善に進呈していたようである。それに付け加える形で、この書物の配布先などを明善の側近である鈴木信一と相談したところ、静岡県庁側が千部、内務省の方で五百部配布することになったので承知して欲しい旨を言い置いている。

注目すべきは、この『金原明善と其事業』の流布に内務省が関与している点である。内務省はこの当時、地方改良運動を始めとする体制強化を企図した試みを積極的に展開していた。内務省と強いつながりを持っていた中

中央報徳会が機関紙『斯民』を発行したのもその一環であるが、この『斯民』には明善も頻繁に登場する。この事は、明善が、中央報徳会の幹部Ⅱ内務官僚たちの意図する体制強化を達成するうえで有益な存在として捉えられていたことを物語っていると考えて良いだろう。明善はここでも、内務官僚たちの政治支配の材料として利用されていたのである。

明善と原口の関係性について、残念ながらここに示した以上のことは不明である。しかしながら明善のもとには、原口から「貴下事業二関スル書籍ハ東京警昭者田山京堯方ニ於テ之ヲ再版シ、定価ヲ金三拾銭トシテ金式拾五六銭位ヲ以テ販売スルコトニ相定リ候」という書簡が送られていることから⁽²⁶⁾、明善は『金原明善と其事業』が誰の手によっていくらで配布（販売）されるかという情報を、他でもない書物の作成主体である官僚の口から聞いていたことが分かる。つまるところ、明善は、自身の事蹟をまとめた本が全国に配布され、官僚たちにとつて都合の良い「効果」をもたらずことを知っていたのである。明善は、自らが体制強化のイデオロギーとして機能することに對し、積極的に協力していたのである。

③『金原明善翁』の場合

さて、次に『金原明善翁』に目を移そう。この書物は、一九一〇（明治四三）年に刊行されたもので、総ページ数は三一九頁である。内容は、土方久元⁽²⁷⁾による序文から始まり、明善本人や明善が書いた書の写真などが冒頭に掲載されている。その後は明善が定めた「家憲」や「幼時」における彼のエピソード、あるいは天龍川の治水や「免囚保護」といった彼が行った事業の内容や彼に関する「逸事」の紹介がなされている。最後に「拾遺録」として、明善の講演の筆録が収録されている。作者である碧瑠璃園は、本名を渡辺勝といい、一八六四（元治元）年に名古屋に生まれた。「碧瑠璃園」の他にも「渡辺霞亭」や「緑生園」、「黒法師」など様々なペンネームを使って小説を執筆した人物で、この頃は大阪朝日新聞の記者を勤めながら数々の小説や演劇脚本を執筆した、当時の人気作家の一人である⁽²⁸⁾。

実は彼は、この『金原明善翁』が刊行される前に、大阪朝日新聞の朝刊で「金原明善翁」という連載小説を掲

載していた。表②は大阪朝日新聞紙上に掲載された「金原明善」の内容を、表③は『金原明善翁』の内容をそれぞれ一覽表にしたものである。両表を比較すると、内容がほぼ一致することが分かる。また「金原明善翁」の連載が終了する日の記事に、「金原明善翁」は健全なる読者より多大なる喝采を以て迎へられ、出版希望の申込み続々あり、名古屋興風書院は「興風叢書」第三巻として十月中旬発行の計画あり」と述べている。²⁹⁾ これらのことから『金原明善翁』は、大阪朝日新聞に掲載していた連載小説「金原明善翁」を書籍化したものであることが分かる。

では、この小説自体はいつ、どの様なプロセスを経て執筆されたのであろうか。次にこの点についてみていこう。手始めに、次の史料を見てほしい。これは、明治四三年一月九日に、渡辺霞亭（碧瑠璃園）から明善に宛てて出された書簡の一部である。³⁰⁾

(表) 金原様

拝答

(裏)

大阪市玉造唐居町

渡辺霞亭

拝復先刻ハ参上面白き御話にて思はず寿命の延びる心地仕候、まことに不思議の御縁にて御懇命を得、小生も新生命を開き候心地に候、不束者に候へども幾久敷御見捨なく御願申上候、(中略)、小生実名ハ勝にて通称に霞亭の号を用ひ来り候、然し只今にては実名にて通用致さず専ら霞亭を使用致し候儀に御座候、御返事まで 勿々不一

渡辺霞亭

一月九日夜

金原先生

侍史

藤森様へも宜しく御願申上候

内容から推察するに、霞亭と明善の関係性がそれほど深くない段階でなされたやり取りであろう。最後の方で、自身の本名とペンネームについて説明する霞亭の姿が両者の関係性を端的に表している。

No.	発行日	面	タイトル	備考
1	1910年7月19日	4	家憲(1)	-
2	1910年7月20日	4	家憲(2)	-
3	1910年7月21日	7	幼時(1)	-
4	1910年7月22日	4	幼時(2)	-
5	1910年7月24日	4	幼時(3)	-
6	1910年7月25日	7	幼時(4)	末に「記者曰く、翁の訓話逸聞を知らるゝ方は「金原明善翁筆者」宛にて続々投書せられんことを乞ふ。」とある。
7	1910年7月26日	4	主家の改革	-
8	1910年7月27日	4	最初の貿易	-
9	1910年7月28日	8	翁と天龍川(1)	-
10	1910年7月29日	4	翁と天龍川(2)	-
11	1910年7月30日	8	翁と天龍川(4)	-
12	1910年7月31日	6	翁と天龍川(5)	-
13	1910年8月1日	7	翁と天龍川(6)	-
14	1910年8月2日	5	翁と天龍川(7)	-
15	1910年8月3日	8	翁と天龍川(8)	-
16	1910年8月4日	8	翁と天龍川(8)	史料上「8」となっていたのでそのまま記載した。
17	1910年8月5日	8	翁と天龍川(9)	-
18	1910年8月6日	4	翁と天龍川(10)	-
19	1910年8月7日	6	翁と天龍川(11)	-
20	1910年8月8日	5	翁と天龍川(12)	-
21	1910年8月9日	4	翁と天龍川(12)	海防費献納によって入手した短刀の写真が掲載されている。
22	1910年8月10日	8	翁と天龍川(13)	三条実美書額の写真が掲載されている。
23	1910年8月11日	7	翁と天龍川(14)	尚憲皇太后「御製」の写真が掲載されている。
24	1910年8月12日	4	翁と天龍川(15)	金杯の写真が掲載されている。
25	1910年8月13日	4	翁と天龍川(16)	安間村の金原邸の写真が掲載されている。
26	1910年8月14日	6	翁の位記返上(1)	金原餅の写真が掲載されている。
27	1910年8月15日	4	翁の位記返上(2)	-
28	1910年8月16日	8	翁の位記返上(3)	-
29	1910年8月17日	4	翁の植林事業(1)	-
30	1910年8月18日	4	翁の植林事業(2)	-
31	1910年8月19日	4	翁の植林事業(3)	鹿島周辺の天龍川の写真が掲載されている。
32	1910年8月20日	4	翁の植林事業(4)	天龍川の風景写真が掲載されている。
33	1910年8月21日	6	翁の植林事業(5)	天龍川の風景写真が掲載されている。
34	1910年8月22日	6	翁の植林事業(6)	「献植御料林」の写真が掲載されている。
35	1910年8月23日	8	翁の逸事(1)	-
36	1910年8月24日	8	翁の逸事(2)	-
37	1910年8月25日	8	翁の逸事(3)	-
38	1910年8月26日	8	翁の逸事(4)	-

39	1910年8月27日	8	翁の逸事(5)	-
40	1910年8月28日	4	翁の逸事(6)	-
41	1910年8月29日	6	翁の逸事(7)	瀬尻山中の金原疏水財団事務所の写真が掲載されている。
42	1910年8月30日	8	翁の逸事(8)	財団林と模範林の境目とそこに立つ鈴木信一の写真が掲載されている。
43	1910年8月31日	4	翁の逸事(9)	天龍川水防事務所の写真が掲載されている。
44	1910年9月1日	5	翁の逸事(10)	天龍河畔の景色(船明村付近)の写真が掲載されている。
45	1910年9月2日	8	翁と天龍運輸会社	-
46	1910年9月3日	4	翁と小野組(1)	瀬尻山中の神社(「大山住神社」)のスケッチが掲載されている。
47	1910年9月4日	4	翁と小野組(2)	前号までの内容における訂正記事を掲載。
48	1910年9月5日	6	翁と小野組(3)	天龍河畔の景色の写真を掲載している。/「金原明善翁来阪」の記事も併載。
49	1910年9月6日	8	翁と小野組(4)	「覚恩寺の改修堤防」の写真が掲載されている。
50	1910年9月7日	8	翁と小野組(5)	天竜運輸会社の写真が掲載されている。
51	1910年9月8日	4	翁と小野組(6)	-
52	1910年9月9日	4	翁と小野組(7)	訂正文が掲載
53	1910年9月10日	-	-	休載
54	1910年9月11日	4	翁と免囚保護(上)	「鮎釣八幡森」の写真が掲載されている。
55	1910年9月12日	4	翁と免囚保護(下)	宇半場における鉄橋の写真が掲載されている。
56	1910年9月13日	8	翁と天城山御料林	明善筆の書の写真を掲載している。
57	1910年9月14日	4	翁と富士模範林	釜ヶ淵の写真が掲載されている。
58	1910年9月15日	5	翁と岐阜県献植(上)	-
59	1910年9月16日	4	翁と岐阜県献植(下)	-
60	1910年9月17日	7	翁と北海道拓殖(上)	明善筆の書の写真を掲載している。
61	1910年9月18日	9	翁と北海道拓殖(下)	-
62	1910年9月19日	6	(再び)翁の逸事(1)	-
63	1910年9月20日	8	(再び)翁の逸事(2)	-
64	1910年9月21日	4	(再び)翁の逸事(3)	-
65	1910年9月22日	8	(再び)翁の逸事(4)	金杯の写真が掲載されている。
66	1910年9月23日	4	(再び)翁の逸事(5)	作者不詳の日本画の写真が掲載されている。
67	1910年9月24日	8	(再び)翁の逸事(6)	謎のスケッチが掲載されている。
68	1910年9月25日	7	(再び)翁の逸事(7)	明善が北京在中に金森吉次郎に贈った書翰の写真が掲載されている。
69	1910年9月26日	7	(再び)翁の逸事(8)	「宝袋」と扇子の写真が掲載されている。
70	1910年9月27日	8	(再び)翁の逸事(9)	「書齋に於ける翁」として明善の写真が掲載されている。
71	1910年9月28日	8	(再び)翁の逸事(10)	-
71	1910年9月29日	8	翁の本領	・明善の書画の写真が掲載されている。 ・末尾に「序に記す「金原明善翁」は健実なる読者より多大なる喝采を以て迎へられ、出版希望の申込み続々あり、名古屋興風書院は「興風叢書」第三巻として十月中旬発行の計画あり、東京にては東京堂、大阪にては盛文館(北区東梅田町)発売所となりて読者の便利を図る筈なれば購買希望の方は便宜発売元へ申込まるべし。」とある。

註:大阪朝日新聞(1910年7月9日~9月29日)を参考に作成。

表3 『金原明善翁』の内容一覧

番号	タイトル	備考
1	第一 家憲	-
2	第二 幼時	-
3	第三 主家の改革	-
4	第四 最初の貿易	-
5	第五 翁と天龍川	「所有財産取調書目録」「財産献納願書」を収録
6	第六 翁の位記返上	「位記返上之儀に付嘆願書」を収録
7	第七 翁の植林事業	金原疏水財団設立の「趣意」文を収録
8	第八 翁と天竜運輸会社	-
9	第九 翁と小野組	-
10	第十 翁と免囚保護	-
11	第十一 翁と天城山御料林	-
12	第十二 翁と富士模範林	-
13	第十三 翁と岐阜縣植林	-
14	第十四 翁と北海道拓殖	-
15	第十五 翁と丸家銀行	-
16	第十六 翁と治水協会	-
17	第十七 翁の逸事	-
18	第十八 翁の本領	『経歴及希望』中の「希望」の一部を収録
19	拾遺録	明善が行った講演(「一等国民の心得」「修養談」)の筆記録を収録

碧瑠璃園『金原明善翁』より作成。

注目すべきは、書簡の冒頭から中盤にかけての内容である。そこで霞亭は、明善の話を聞いて寿命が延びる心地がした、あるいは新しい生命が開けたような心地がしたと述べている。

明善の話は霞亭に、かなり大きなインパクトを与えたとみえる。あるいはこのときの経験をもとにして、霞亭は明善を題材にした小説を書いたのではないだろうか。いずれにしても明善の話は、渡辺霞亭という一人の小説家にとっても、極めて好意的に受け入れられるものだったことが分かる。

さてこの書簡からおおよそ八ヶ月後、ちょうど大阪朝日新聞での小説の連載が終わりかけた九月下旬に、再び霞亭から明善に宛てて次の書簡が出された。⁽¹⁾

(表)

遠江国浜名郡和田村

金原明善様

侍史

(裏)

大阪市北区中之島三丁目

朝日新聞合資会社

明治四十三年九月廿九日

渡辺霞亭

拝呈先日は御手紙有難く拝見仕候、内田実氏御厄介相願候由帰郷の途次立ち寄り厚く礼を述べ行き申候、其節

「金原先生毎日の御揮毫五枚位と御定めあり度く候、十枚二十枚と御認めにては健康に宜しかるまじ」

としみじみ申居候、小生も同感に付乍序申上候、

朝日新聞上掲載中の記事も本日を以て終局といたし申候、長々御配慮深謝二不堪候処、今朝になり読者より二三逸事を投書し来り候へど今は何とも致し方無之に付き、書物印刷の時さし加え候事二致し候、交合廻付相成候はゞ御手許へさし出候間、乍御面倒御披見被為下度奉懇願候、何れ其中拝眉万縷可申候へど不取敢御礼まで申上候、

匆々不一

渡辺霞亭

九月二十九日

金原先生

侍史

ここでは、日々二十枚近く揮毫をする明善の身体を案じるとともに、小説の連載が終了するにあたって、明善の長きにわたる「配慮」に感謝する霞亭の姿を見て取ることが出来る。冒頭にある、明善のもとに「厄介」になった内田実という人物については後ほど触れる。ここで注目すべきは、小説の読者のリアクションを確認することが出来る点である。霞亭によれば、明善に手紙を差し出す日の朝、小説の読者から二、三通の投書があったという。この投書が具体的にいかなる物であったかは判然としない。だが、一九一〇（明治四三）年七月二五日の記事の末尾に、「記者曰く、翁の訓話逸聞を知らるゝ方は「金原明善翁筆者」宛にて続々投書せられんことを乞ふ」とあることから、この日霞亭のもとに送られてきた投書の内容は、明善の「訓話」や「逸聞」であると捉えて良いだろう。要するに、明善に関する情報提供を求めた霞亭たちに対し、読者が反応を示したことを示しているのである。そればかりではない。ここからは、小説の連載が始まった一九一〇年の時点で既に、読者が金原明善と

いう人物の存在及び彼に関する情報を知り得ていたという
ことを窺い知ることが出来る。ここでは、小説を発行
する側の呼びかけに呼応してその情報を提供するという、
メディアを発信する側と受容する側との往還関係を見て
取れよう。

さて、これら読者からの投書はその後どうなったので
あろうか。霞亭によれば、小説の連載が終了する段階に
あつてはその投書を「何とも致し方無」いので、書物を
印刷する際にそれらを差し加えることにする、という。

そこで新聞に連載されていた段階の「金原明善翁」と書
籍化されたものの内容を比較してみると、確かに前者に
みられなかった「逸事」が確認出来る。したがって、読
者からの投書は霞亭の言うとおり、書籍化された『金原
明善翁』のなかに収録されたうえで世間に流通していっ
たと捉えて良いだろう。そしてその内容は、明善本人に
よるチェックを受けていた。霞亭が明善に対し、初稿が
まとまった段階でそれを送付するので内容を確認して欲
しいと「懇願」していることが、その様子を物語ってい
よう。また別の日に、霞亭は「御伝記第一回校正出来に
付き御回付申上候、御披見の上誤謬の箇所へは御朱記の

上、小生まで御回付被下度候」という、明善に書物の内
容の校正を依頼する書簡を投じている⁽³³⁾。これらのことか
ら、明善が霞亭への協力を通して、自身のイメージ形成
に多分に関与していたことが窺える⁽³⁴⁾。

では、こうして明善の協力を得て作成されたこの「伝
記」は、当時の人びとにはどの様に受け止められたので
あろうか。この点を考えるために、まずは次の史料を見
てみよう。やや長いが、全文引用する。

謹啓

其後ハ御無音御起居如何ヤ

こゝに内田実氏を紹介して御依頼申し度事有之候、
御聞及びもあるまじけれど、内田氏ハ小生郷里にて
十三四町歩の果樹園を拓き先づ成功したる果樹栽培
家に御座候、

果樹栽培が終局の目的ではなく他に国家的大企画抱
負を持しをる、一種の気概家に御座候、其の気概往
々にして常矩を逸することあり、郷里にてハ奇人を
以て目されをり候、

人格の修養に於て多年苦心経営し兎に角日々園丁と

共に襪を上げて鋏を手にしをり候、(中略)

頃来金原明善翁の伝記を読みて我が理想の人を得たる如く喜びをりし男に候、

九月六日の紙上明善翁来阪との記事を見て既に故人なりと思ひをりし人が尚ほ生存中なるを知り、未見の父母に邂逅したる如く雀躍したることも有之候、内田が明善翁と直接四五時間なりとも対談の榮を得たしといふは翁を一偉人として崇拜する誠意熱情の出でたるものにて、単に奇行を以て己を銜ふ如き狂人的行為には無之候、

何卒大兄の力を以て金原翁にこの内田紹介の勞を採られたく、小生より奉願御依頼と申すはこの事に御座候、

乍恐縮千万金原翁の滞阪中―滞阪短時日ならば其後の居所は何処か―是非面会したしとの事につき、予めかやうかやうの者が尋ね来る由明善翁に御通知して下さるやうのこと出来申す間敷や、大兄御差支なれば社中どなたにても宜しく候へども、翁の滞阪日数又面会に都合のよき日時―何人にても多少志ある者には面会さるゝや又ハ一切左様の事をせぬ人か―

等御返電給はらば好都合に有之候、哀れ僻陬の一野人御多忙中の御障りもな□□、たゞしき御依頼を斥け給ふ事勿れと申す、

右当用のみ

九月八日

素川大兄

侍史

如是閑叟帰阪せしにや侃堂兄健在にや

碧梧桐

この史料は、「碧梧桐」という人物から「素川大兄」、すなわちこの当時大阪朝日新聞社の社主を務めていた鳥居赫雄に宛てて出された書簡である。⁶⁵⁾ 差出人の「碧梧桐」とは、明治・大正・昭和にわたって活躍した俳人、河東碧梧桐であろう。⁶⁶⁾ 彼は自身のとある知人を紹介し、鳥居にその人物を明善に引き合わせる仲介役をやつて欲しいと訴えていることが分かる。

ここで碧梧桐に紹介されている人物こそ、先に霞亭が明善宛の書簡のなかで述べていた内田実その人である。この書簡によれば、内田は、自身の故郷で果樹園を営む

人物であるらしい。彼は「国家的大企画抱負」を持った「気概家」であるが、その気概が昂ぶりすぎているために、地域では少し浮いた存在であるという。だが彼は人格の修養には長けており、日々粗末な衣服を纏って農業に精励する、そんな人物であると碧梧桐はいう。ここからは絶えず修養に励みながら、国家のために農業に勤むといった内田の人となりが見える。

そんな彼は、最近明善の伝記を読んで自身の理想的な人物に出逢ったように喜んだという。しかも内田は、明善は既に故人だと思っていれば後日大阪にやってくるの記事を目にし、四、五時間だけでも良いから直接会って話したいと言っているという。その思いは、明善を一人の偉人として崇拜することに起因し、決して狂気によるものではない、と碧梧桐は念押ししている。ここでは内田が、先に見た碧瑠璃園の「金原明善翁」の読者であったことが分かると同時に、ただ慕うだけではなく、直接明善と会って話したいとまで言い出すほどの、熱烈な明善支持者であることが窺えるのである。内田という一人の読者が、明善の伝記を読んだ結果、明善を「偉人」として認めるまでに至ったということが、この書簡

から読み取れるのである。

内田が明善を、一人の偉人として崇拜する程の情熱を持っていたことは、紛れもない事実のようである。この書簡が認められてから数日経た九月一八日には、内田本人から明善に宛てて書簡が出されている。⁹⁷⁾それによれば、内田は、自分のことは鳥居による紹介状によって既知していると思うが、と切り出したうえで次のように言う。自分は「廿年来聊力国事二尺サンガ為メ果樹栽培事業二従事」してきたが、今後の経営のあり方や家のおさめ方について明善の教えを受けたいと思っている。先日来阪されているときに会いたかったが叶わなかったため、改めて面会したいと思ひ、身支度を調べて今浜松に向かっている途次である。本月二〇日頃には浜松に着けると思うので、どうか面会して欲しい、と。半ば強引ではあれはが非でも会いたい、と、内田は「熱血懇願」する。そして九月二九日には先に見たように、内田が明善に「厄介」になつて故郷に帰る道すがら自分のところに寄つていったと霞亭が書簡に認めていることを踏まえれば、内田の願ひは成就したのであろう。めでたく内田は、「理想の人」である明善に面会することを果たしたのである。

この内田の事例からは、明善の表象が読者、さらに言えば当時の人びとに、どの様な影響を与えたかについて考えることが出来る。すなわち、「金原明善翁」で描かれる「偉人」としての明善は、多くの読者たちに好意的に受け入れられたといえる。なかには内田のように、明善をはつきりと「偉人」として崇拜し、たとえ遠方であっても明善に直接会って教えを受けたいという人物さえいた。この時代、メディアにおける表象に影響を受けて明善を慕う主体が確かに存在したのである。

三 「青年」たちにとつての「金原明善」

最後に、当時の「青年」たちの間で明善がどの様に受け入れられたかについてみておきたい。具体的な検討に入る前に、ここではとある教育者の明善観について確認しておこう。次の史料は、先に分析した水野定治が一六（大正五）年に著した『天童翁金原明善』に収録されている、その人物が明善について記したものの一部である。

人生に徹底した人

愛知縣立農林学校長 山崎延吉

吾輩の翁と交際するは正に十年以上になつたが、数十年の交際をなせる他の人よりも、より多くの教訓を得たりと断言し得るは、吾輩の翁に負ふ所の大きなものがある為である。

教を受くる者が批評がましき事を言ふは好ましからぬ事であるが、若し許さるゝならば吾輩は一言

翁は人生に徹底したる人

であるとする。希有の点よりせば、偉人とも云はるゝであらう、哲人とも申されよう、又神位の人でもあるであらう。

(中略)

活動は翁の生命であり、事業は翁の娯楽である。

故に翁は活動に生き、事業で楽しんで居る。今の人の如く、生きているが為に活動し、享樂の為に事業をするのとは雲泥の差がある。

(中略)

翁は人生に徹底した人であるばかりでなく、日本

臣民としても徹底した人である。翁の歴史は日本臣民としての模範を示すものであると、吾輩は断言して憚らないものである。

(中略)

常人に見るべからざる事があり、普通の人に出てぬ事が出来、凡人に考ふべからざる事があるのは、翁の活動の活歴史である。故に翁は現代歴史の一部を分担するものと謂つてもよからうと思ふが、其處に翁の生命と翁の価値とがあると信ずる。

この言葉は、愛知農林学校の校長を務めた山崎延吉によるものである。⁽³⁸⁾ ここからは、山崎にとつて明善が如何なる人物として捉えられていたかを窺うことが出来る。すなわち、山崎は、明善と十数年交際して多くの教訓を受けたと主張する。その上で山崎は、明善を「人生を徹底したる人」と位置付け、その稀なる存在を以て「偉人」もしくは「神位の人」として称揚する。その根拠として、明善が「活動」を生きがいとしていることを挙げ、明善が実行主義の人であると述べる。加えて、そうした明善は、活動と事業が自己実現において目的手段化している

現今の人びとは雲泥の差ほどの違いがあると述べているように、両者を比較しながらその「偉人」性を紹介される。そんな明善は人生に徹底した人であるばかりでなく、日本臣民としても徹底した人物であったと山崎は述べる。そこにおける明善の位置づけは、「日本臣民としての模範」たる存在であった。「偉人」である明善はもはや活きた歴史であり、そこに明善の価値は求められることを宣言して、山崎は口をつぐむ。

ここで重要なのは、山崎が明確に明善を「偉人」として称揚していることだけでなく、明善を「世界に珍しい人」や「神位の人」といった複数の誇張表現を用いてその「偉人」性を高めたうえで、最終的に明善を「日本臣民の模範」と位置付けている点である。山崎は、実際に明善と交際するなかで明善の「偉人」たる内面性を知り、そのうえで明善を、普く日本臣民が目指すべき模範的な存在として認識し、称揚していたことが分かるのである。こうした認識をもちながら、山崎は農業学校の校長として、あるいは愛知県農会の幹部として、様々な場面で講演活動を行っていた。そこでは時として、明善について述べることもあったようである。例えば、山崎の講演

を筆録・刊行した『農村自治』という書物には、「本年八十三歳になる金原明善と云ふ人は、天瀧川アマノカの治水、植林や、三方ヶ原の開墾や福澤先生すら持て余したと云ふ銀行の整理や其他で有名な人であるが、又儉約家としても有名な人である」と、明善を「節儉家」として強調しながら紹介する山崎の姿が描かれている。ここでは具体的に、明善が弁当の空き箱を回収してまわった話や、明善が長年一つの榲を大切に使った結果その使い古しの榲が京都の豪商に二五円で買い取られた話などが紹介されている。

こうした講演活動が聴衆にとって、節約生活を営む上での模範的な「儉約家」として明善を捉えるイメージの形成・定着をもたらす契機となつたのではないだろうか。すなわちここで押さえておくべきは、山崎個人の明善観それ自体もさることながら、山崎が講演という活動を通して明善について語るという行為そのものである。

その点に留意しつつ、山崎が農林学校という実業学校の校長であったことを思い返すとき、山崎が学校の生徒である「青年」たちにも、先にみたような「儉約家」としての明善、あるいはそれ以外のイメージで捉えた明善

を引き合いに出しながら、講話という教育活動を試みていた可能性を考えることが出来る。言い換えれば、山崎による、オーラルな形式に基づく「偉人」（あるいは「日本臣民の模範」）としての明善イメージの伝達によって、

「青年」たちもまた明善を特別視するようになり、明善を称揚するようになったのではないかと考えられるのである。現に明善のもとには、かつて安城農林学校に在籍して山崎に薫陶を受けた「青年」によって認められた書簡が出されているが⁹⁹、そこには「実に小生安城農林学校在学之当時、山崎先生より貴翁先生を朝に夕二耳にし窃に敬慕致居候」と記されている。この書簡からは、山崎が頻繁に明善のことを「青年」たちに向けて口にしていたことと、それを聞きながら学校生活を送った「青年」たちが明善のことを「敬慕」するようになっていたことが読み取れる。その際山崎が、先にみたようなイメージにおける明善を紹介していたことは想像に難くない。すなわち山崎の存在によって、「青年」たちは明善を、「偉人」もしくは「日本臣民の模範」として受容していたのである。

因みにこの書簡のなかで、差出人である兼松という人

物は「先生之貴書尚も二三枚切望致居候」というように、明善に揮毫を求めている。掛け物にするために三枚程書いて送って欲しいと頼むこの「青年」は、明善に書いて欲しい文字の希望も明善に伝えていた。その文字は「精神修養之資とするに足」り、かつ「最芽出度文句」が良いという。こうした「青年」たち自身による行動を念頭においたとき、当時の「青年」たちは、イデオログたちによる「修養の模範」としての明善イメージを受動的に受容していたわけではなく、むしろ積極的に明善を慕い、その姿に憧れを抱いていたのではないだろうか。この点に関して、新潟県に住むとある「青年」が次のような書簡を明善に宛てて出している。⁽⁴⁰⁾

拜啓新緑之候愈々御壯健先づ以御祝申上候、今回迂生の如き農業民が失礼をも顧見ず恐縮ながら粗書御上申候条御迷惑様乍何卒迂生の意ヲ御察し被下度く候、

小生は新潟県三島郡島田村大字吉田佐藤治助長男に之有り候、二年前農業学校卒業後目下吾父上と共に農業及植林に熱心に精励仕り有り候、

去年六月新潟市に開催の山林会に出席仕り、傍ら御尊翁の御講話を拝聴仕り、御尊身の御老躰をもや顧り見られず林業国益事業に御心盡しの事、以来平素御尊翁の御徳に思慕の念に堪へず日夜思ひ出し、恐縮ながら別にたよる人も無く直接御頼入り候、

御翁の筆蹟を弊屋に掲げ朝夕之を拝し御徳高き翁を思ひ出し、せめては萬分之一も実行せん誠心よりの願に之有り追慕之余り御願申上げ候次第、御聞入れ下被れ度く候、

別封絹地及紙一枚之有り小条御迷惑ながら見捨てなく御筆蹟を願入り候、

何れにても一枚に拙宅屋号岩古館と御書し下されば幸に候、

金二元や小生日常貯金仕り候金円に之有り候、少々なれど出獄人保護会へ寄附仕り度く候条御受取り被(下)れ度く候、

右願は迂生誠心よりの願二候間、御見捨なく御察し下被れ候、

再拝

新潟県三島郡島田村大字吉田

この書簡の差出人である佐藤一郎という人物は、二年前に農業学校を卒業した後、父親とともに農業と林業に従事している「青年」である。彼はかつて明善の講演を聞き、老体を顧みずに林業などの国益に関わる事業に心を砕く明善の姿に深い感銘をうけたという。その日以来いつも明善のことを思い慕ってきたので、明善の筆蹟を家に飾って朝夕拝み、明善のことを忘れないようにしながら少しでも明善と同じ気持ちでいるよう心掛けたい、そう言いながら、彼は一生懸命明善に揮毫を依頼するのである。

ここに見られるのは、明善の講演を聞いて以降明善に魅せられ、日頃貯めてきた貯金を差し出してまでも明善に揮毫を求める、一人の民衆の姿である。そこには、明善を「偉人」として称揚する言葉は見当たらない。しかしながら彼は、表現を変えつつ、何度も何度も明善に揮毫を願う。彼にとつて明善は、まさに「実業家」として憧憬すべき存在であったと言えよう。「青年」たちは明善

を、一方で「修養の模範」として捉えつつも、他方でそれとは異なる文脈から明善を慕いながら、結果として明善の顕彰につながる思想を形成していたと言えるのではないだろうか。

むすびにかえて

これまでみてきたように、明善は様々な意識のなかで「偉人」として称揚された。以下、本稿の内容を簡単に振り返っておこう。

明治二〇〜三〇年代においては、明善は「実業家」の模範的存在として評価されていた。それはこの時期に発行された名士伝や経済系の雑誌といった複数のメディアにおいて、明善が多々取り上げられていることから窺うことが出来る⁽⁴⁾。したがって、この段階における明善の「偉人」たる所以は、あくまで「実業」を興して成功したことに求められているといえよう。

こうした論調の背景には、近代日本社会における立身出世主義の存在が挙げられる⁽⁴⁾。特に明治二〇年代は、近代社会を牽引していく存在として「実業家」に大きな

期待が寄せられた時代であった⁽⁴³⁾。しかし次第に立身出世の機会が減少し、先述したように「高等遊民」や「煩悶青年」が発生するようになると、そういった「青年」たちの思想を「善導」しようという試みがみられるようになる。そうした傾向が見られるのが明治三〇年代後半、日露戦争を経て地方改良運動が展開され始める時期であった。こうした潮流に乗って、明善を捉える論調も変化した。それまで「平民」の身分で富と名声を獲得することに成功した「実業家」の模範的存在として捉えられていた明善は、「実業家」となったこと（結果）よりも「実業家」と成り得た内面性を評価されるようになったのである。一例を挙げよう。次の岩崎勝三郎の言葉に耳を傾けて欲しい。

（前略）余輩嘗て万能を望むものにあらず。獨り特長を以て俟つに切なるものなり。然りと雖も此特長や一に天性に由来するものにあらずして多くは彼れか平素の行為に在り。徒らに天性を仮つて自養する所なからんか。即ち其才を恃むものにして大才ならず。世の所謂小才者を以て終るのみ、才者才を恃み

て才ならず。愚者愚を恃みて愚ならずとは。夫れ古の金言ならずや。

抑も人を評する由来雑事に属す。況んや我未た破帽短袴の書生風を脱せざるに於てをや。彼れ余を知らずと雖も余や幸に彼れ人物の性行と其特長とを知る。而して時勢は將さに此人物を要求せんと欲す。若し果して此希望を充足せしめんか。宜しく之を天下に表彰し提擲して各其所を得せしむるは。是実に経世の好手段たるべく。一は以て立志修身の訓誨となし。後進者をして先輩の言行に基くの捷徑たらしめんとするにあり。（後略）

ここに竹内洋氏のいう「冷却イデオロギー」としての「修養主義」をみるのは容易であろう⁽⁴⁴⁾。この岩崎の言葉は、彼が一九〇一年に著した『立身資料 人物と長所』における「序文」の一部である。ここで岩崎は、人間の長所（「特長」）は先天的なものではなく、あくまで「平素の行為」によつて醸成されるものであると指摘する。その上で、時代の要望に応えるべく、「特長」のある「先輩」の言動を提示（「表彰」）し、それによつて「後進者」

たちの「立志修身の訓誨」とすることを企図していることが分かる。岩崎は、読者である「後進者」たちに対し、「経世の好手段」と「立志修身の訓誨」という二種類の“抛り所”を提示しながら、彼らが“危険”思想に傾斜しないよう説得していたのであった。

しかしながらこうした論調は、時を経るに従って変化した。具体的には、単なる精神修養上の模範から教育勅語の模範的な体現者、さらには戦時体制下における自己犠牲の模範像へと、日本社会が全体主義化することと相俟って、明善はその時々の時勢に適合するイメージで捉えられるようになる。明善の「偉人」たる所以は、その時代的なコンテクストによって変化するものだったのである。

以上の内容を踏まえて、第二節では、「偉人」としての明善イメージが形成される際に重要な位置に置かれたと思われる書物に着目し、作成者の意識及び作成過程、あるいは読者の意識を分析した。

はじめにみた水野は、明善の「門弟」という立場から「偉人」としての明善イメージを、書物の作成を通して発信した。その際に見られたのは、ただ単に明善の「偉

人」性を紹介するのではなく、「非常時局」に対応することを念頭に置いて総力戦体制の一端に明善をはめ込むという明確な意識であった。水野は、「門弟」という特別な立場から明善を介して、総力戦体制下における人心統合を促したのであった。そしてこの書物は、版を重ねたことに表されるように、多数の読者に読まれた。

その水野が参照したという『金原明善翁と其事業』は、当時静岡県行政を担っていた県知事周辺が作成した書物であった。ここでは、県知事の松井、県知事官房主事の原口という二人の行政官僚が、明善をどの様に捉え「偉人」として発信していたかを確認した。そこに見られたのは、明善を「偉人」と位置付ける一方で、明善を他の受章者とは区別しながら明善の事蹟を紹介するという、明らかに明善を特別視する認識であった。その背景には、「高等遊民」問題や思想問題といった様々な政治課題に対応するべく、明善を「修養の模範」として称揚しようとする政治的恣意性が存在した。またこの書物が流布する過程には、内務省も関与していた。けだしこの書物は、単に静岡県という地方行政だけに止まらず国政レベルにおいても、その存在感を発揮していたのであった。

水野が影響を受けたというもう一方の書物『金原明善翁』は、当時の人気作家が著した書物であった。著者である渡辺霞亭は、この書物を刊行する以前に明善と面会し、明善の話の「面白さ」を知ったことで大阪朝日新聞紙上に「金原明善翁」という連載小説を発表した。その小説は、多くの読者たちに好感をもって受け入れられ、それを受けて刊行されたのが『金原明善翁』という書物であった。読者の反応は凄まじく、なかには直接明善と会って話をしたいと、わざわざ明善のもとを尋ねる者もいた。それ程までに、この小説は当時の人びとに多大な影響を与えたのである。さらに注目すべきは、小説の執筆や書籍の刊行に際して、明善自身が小説の内容を事前に点検する役目を負っていたことである。このことは、明善が「偉人」性を帯びた自身のイメージ発信に、少なからず関わっていたことを示している。言い換えればそれは、明善自らが自身を「偉人」と位置付けていたことを意味する。⁽⁴⁵⁾このとき、明善が如何なる思想を抱いていたかについては定かではないが、ともかく彼は、自身の「偉人」顕彰に少なからず与っていたのである。

第三節では、山崎延吉の明善観と、それに基づく明善

イメージの拡大の様相を明らかにした。実業学校の校長であった山崎は、明善を儉約における「偉人」として捉え、その姿を「日本臣民の模範」として称揚した。そうした認識に基づきながら山崎は、自身が教える学校の生徒たちに対し、明善が「偉人」であるとの価値観を語っていた。それを聞いた生徒たちもまた、明善を「偉人」として認識し、彼を慕うようになったのである。山崎の存在は、当時の「青年」が明善を「偉人」として顕彰するうえで、極めて重大な影響を与えるものだった。

またここでは、山崎の生徒ではない「青年」たちの意識も確認した。そこにいたのは直接明善の講演を聞いたことから明善を「修養の師」と仰ぎ、明善を慕う「青年」の姿であった。その熱の高さは、修養を促すために有効な書の揮毫を明善に求める姿にはつきりと表されている。しかし一方で、松井や山崎らの意図するものとは異なる思想を彼らは持っていた。彼らは「ささやかな立身出世」を望みながら、明善を自己実現のための理想的な人物として捉えていたのである。⁽⁴⁶⁾

この様に、明善の「偉人」化は、近代以降の書物流通市場の発展と、⁽⁴⁷⁾明善本人や山崎による講演活動といった

個人的行為とが相俟って、明善に対する顕彰の熱量が上昇したことによって発生していたのである。

以上の検討を経たとき、一つの結論として、近代社会における「偉人」とは、必ずしも歴史上の人物に限定されるものではないことを指摘出来よう。これまでの顕彰をめぐる先行研究においては、先述したように、日清・日露戦争期に様々な「偉人」や「史蹟」が「発見」され、それが当時の人びとに国家主義的イデオロギーを注入する契機となった点については明らかにされてきた。しかしながら、顕彰の対象となる人物が顕彰され始める時点ではまだ存命しており、しかも明治三〇年代中ごろまでは別のイデオロギー装置として機能していた「偉人」が、地方改良運動を画期として天皇制国家の政治支配を支えるイデオロギーとして読み替えられ機能した事例を明らかにした成果は少ないのではないだろうか。この点で、本稿において金原明善を事例として明らかにしたことは、近代日本における「偉人」顕彰のあり方を検討するうえで、ささやかながら意味を有するものであると考える。

最後に、明善の「偉人」化をどの様に評価するかという筆者の見解と、今後の課題について述べておきたい。

明善は、異なる時代的コンテクストに応じて、同じ「偉人」という表現をとりながらも異なる視線で捉えられていた。その内実は人びとの意識を、偏に体制の保持を志向するものに統一することを促すものであった。大正期に至って、行政官僚である松井や原口が明善に着目し、書物を作成してまでも明善の人となりや思想を社会に発信したことは、まさしくこのことを意味する。

翻って、そうした「偉人」としての明善は、常に当時の「青年」たちと向かい合っていた。「青年」たちは、「修養の模範」としての明善を特に好感を持って受け入れた。しかしながら彼らは、明善を、松井たちと同じ文脈で捉えていたわけではない。むしろそこには、立身出世主義の影響を引きずった、「実業」を興すことで立身出世を成し遂げようとする意識の方が色濃く表れていたのではないだろうか。先にみた新潟の「農業生」の存在が、まさに「ささやかな立身出世」を志向する意識の表れとして見ることができよう。

見城悌治氏によれば、一八八〇年代以降「近代報徳思想」が日本社会を席卷してゆくなかで、人びとが報徳思想に則って節約や勤勉に努めたという⁽⁴⁸⁾。そこでは二宮金

次郎が道徳・修養のモデルとして称揚されたというが、明善もまた同じような意識のもとで捉えられた。しかも明善は、近代社会において率先して勤儉力行に努めて「成功」した人物であった。この点を踏まえれば、明善は、人びとが模範とするにはうってつけの人物であった。その意識の表れが「偉人」としての明善イメージに他ならない。すなわちそこには、身近な道徳実践である節儉や勤勉である通俗道徳に努めることで「成功」したいという、民衆の切実な願いが込められていたと考えることが出来よう⁽⁴⁹⁾。近代社会における「金原明善」は、身近な通俗道徳の実践を通して「成功」したという点において、人びとにとって親しみ易い存在だった。それゆえに明善は、「実業家」という観点から「偉人」と称揚されたのちも、地方改良運動以降「修養の模範」としてメディアに姿をみせ続けたのである。

これに対し、同じく近代以降「実業家」として「成功」した他の大倉喜八郎や雨宮敬次郎は、明善と同じように読み替えられることはなかった。彼らでは、地方改良後の日本社会における「修養の模範」という役割を負うことは出来なかったのである。そこに、明善に着目する固

有の意義があるといえよう。まことに金原明善は、近代という時代に適切的な人物として捉えられ、表象されていたのであった。

ところで、当の明善自身は、どのような思想形成を行いながら近代社会を生きていたのであるうか。本稿において、碧瑠璃園による『金原明善翁』の刊行に明善が少なからず関与していたことを明らかにしたが、明善が如何なる思想のもとに自身の「伝記編纂」に関わっていたのかについて、本稿では十分な検討を試みる事が出来なかった。この点は今後の課題である。またそれに関連して、明善は一八八七（明治二〇）年に従五位を下賜されるのだが、「恐懼之至ニ不堪」⁽⁵⁰⁾としてこれを固辞する。永谷健氏によれば、明治維新以降躍進した金銭的な成功者（「富豪」）たちは、近代社会における新しい階層秩序のなかで自らをアイデンティファイするために積極的に授爵を望む姿勢を見せていたと指摘しているが⁽⁵¹⁾、明善のこうした行動は明らかに世の「富豪」たちとは真逆である。明善にとって「褒められること」とは、如何なるものだったのであろうか。それらを明らかにするには、明善の思想形成過程の分析が不可欠である。

近年岸本覚氏が、鳥取県における「褒められた人びと」の事例を収集し、近世から近代における「褒める」ことの質的な変化を考察している。⁽⁵²⁾ こうした成果を踏まえつつ、近代における「褒めること」「褒められること」の意味について考えて行きたい。その際には、国家レベルと地域レベルとに分かちながら考えるべきだと思うが、この地域の事例を検討する際には、顕彰についての先行研究が行ってきたように、地域社会内部の動向を丹念に追う必要がある。明善についていえば、顕彰碑や胸像といった石像文化財⁽⁵³⁾、また冒頭に挙げた『静岡県郷土唱歌』とともに郷土教育の教材として用いられた郷土読本など、地域レベルにおける顕彰の実態を示す史料が多々ある。これらを素材として地域社会内部の動向を丹念に検証し、今回検討した外郭的な事例と比較することによって、より豊かな検証研究が可能となると考える。国家に回収されない主体の形成が求められる現代においてこそ、「偉人」顕彰研究のより一層の深化を図っていく必要がある。

【註】

(1) 静岡県教育会編『静岡県郷土唱歌』、静岡県教育会、一

九三六年。

(2) 『高等小学修身書 巻一 児童用』（一九三三年一月一日文部省検定済、七六一―八二頁）、『高等小学修身書 巻二 児童用』（一九三七年一月七日文部省検定済、八九―一〇六頁）。

(3) 例えば『現代教育科学』（六六〇号、二〇一一年）において、「郷土愛」で見直す道徳教育の本質」という特集が組まれている。ここにおける「郷土愛」とは、愛国心を醸成することを前提にしたものであり、したがってその効果もあくまで愛国心の育成に資することに主眼が置かれている。この構造は戦前日本における修身教育と同質のものであり、到底受け入れられるものではない。

(4) 高木博志「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの―近代における「旧藩」の顕彰―（『歴史評論』六五九号、二〇〇五年）。

(5) 高田祐介「国家と地域の歴史意識形成過程―維新殉難者顕彰をめぐる―」（『歴史学研究』八六五号、二〇一〇年）。

(6) 福島幸宏「戦前における楠氏研究―郷土史の位置―」（『新しい歴史学のために』二三三八号、二〇〇〇年）、市田雅崇「新田義貞をめぐる歴史叙述と顕彰運動―新田神社の別格官幣社昇格運動を中心として―」（由谷裕哉編『郷土

- 「再考―新たな郷土研究を目指して」角川学芸出版、二〇一二年。
- (7) 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』（吉川弘文館、二〇〇六年）など。
- (8) 明善についての主な先行研究は以下のとおり。宮崎安右「衛門「金原明善翁」（『大法輪』二二編一二号、一九五五年）、村上龍太郎「国土開発の先駆者、金原明善翁」（国土計画協会編『国土・総合開発・計画調査』六編六号、一九五六年）、栗原東洋「金原明善翁とその林業理論」（林業経済研究所編『林業経済』一一編九号、一九五八年）、土屋喬雄『日本経営理念史』（麗澤大学出版会、二〇〇二年、新装復刻版、初出は一九六七年）、永野弥三雄「金原明善の北海道殖民農場について」（『常葉学園浜松大学研究論集』四号、一九九二年）、町村敬志『開発主義の構造と心性―戦後日本がダムでみた夢と現実』（御茶の水書房、二〇一一年）、老川慶喜「金原明善 その虚像と実像―天竜運輸会社の経営分析を通して―」（『季刊輸送展望』二〇〇号、一九八六年）、斉藤新「金原明善有志による天龍川改修事業の構想と頓挫」（静岡県近代史研究会編『近代静岡の先駆者』、静岡新聞社、一九九九年）。これらの諸研究においてもその殆どは、明善が「偉人」であることを前提としている。

- (9) 篠田正作『実業立志日本新豪傑伝』、偉業館、一八九二年。
- (10) 岩崎勝三郎『商海立志明治豪商苦心談』、大学館、一九〇一年。
- (11) 竹内洋『立身出世主義「増補版」―近代日本のロマンと欲望』、世界思想社、二〇〇五年。
- (12) 秋田実『偉人成功史』、光玉館、一九一五年、三三一頁。
- (13) 富田文雄『三太郎の鼻唄』、求光閣書店、一九一八年、一六一―一六四頁。
- (14) E・H・キンモンス著、広田照幸・加藤潤・吉田文・伊藤彰浩・高橋一郎訳『立身出世の社会史』、玉川大学出版部、一九九五年。
- (15) 堂屋敷竹次郎『家庭実践教育勅語読本』、明道会、一九二八年。
- (16) 見城悌治『近代報徳思想と日本社会』、ぺりかん社、二〇〇七年。
- (17) 堂屋敷前掲書、「凡例」一頁。
- (18) 堂屋敷前掲書、一〇〇頁。
- (19) 因みに、この書物には二宮尊徳も登場している。明善が「世務」を説明する具体例であるのに対し、尊徳は「公益」を説明する役割を負わされている。この点からも、明善が尊徳とは異なる文脈で捉えられるようになったこ

とを示していよう。

- (20) 前田偉男『青少年錬成の書』、日本青年教育会出版部、一九四三年。
- (21) 水野定治『岐阜縣と金原明善翁』、根尾村森林組合、一九五三年。
- (22) 例えば一九四〇年に刊行された『教育勅語と金原先生』という書物のなかで、著者の能勢天佑は「本書編纂に当り碧瑠璃園氏著金原明善翁、水野定治氏著金原明善、金原精神、御影報徳会発行天龍翁訓話等に依て引援応用し多大の便宜を与へられたる」と証言している。
- (23) 水野定治『金原精神』、実文館、一九三九年。
- (24) 山田万作著、一八九一年
- (25) 一九一三年三月二〇日付。(金原明善記念館所蔵、「原口産業課長書翰」史料番号一)。
- (26) 一九一三年四月一日付。(金原明善記念館所蔵、「原口産業課長書翰」史料番号二)。
- (27) 土方久元(一八三三(天保三)年—一九一八(大正七年))は、明治・大正時代に活躍した政治家である。生まれるは土佐藩。幕末期は三条実美の側近として国事に奔走した。明治政府樹立後は宮内少輔や内務大輔、宮中顧問官や宮内大臣といった要職を歴任した。一八八八(明治二一)年には枢密顧問官として憲法草案審議に携わるな

ど、その存在感は大きかった。佐佐木高行・元田永孚らとともに政府・宮中の保守派勢力の中心として目されていた人物である。なお以上の記述は、『国史大辞典』(第一巻、吉川弘文館、一九九〇年)の「土方久元」(八九六頁)の項を参照のこと。

- (28) 以上の記述については、東京大学総合図書館編『霞亭文庫目録』(雄松堂書店、一九八二年)を参照した。
- (29) 『大阪朝日新聞』(一九一〇年九月二十九日付朝刊)、八頁。
- (30) 一九一〇年一月九日付。(金原明善記念館所蔵、「渡辺霞亭書翰」史料番号二)。
- (31) 金原治山治水財団編『金原明善資料』(金原治山治水財団、一九六八年)下、四五七—四五八頁。史料番号四五六。
- (32) 『大阪朝日新聞』(一九一〇年七月二十五日付朝刊)、七頁。または表②中のN. 6を参照のこと。
- (33) 一九一〇(明治四三)年九月一三日付。(金原明善記念館所蔵、「渡辺霞亭書翰」史料番号三)。
- (34) なおこの点に関して、時折新聞紙上の内容の誤りを訂正する記事が掲載されている。その訂正は人名など細かい点にまで触れられており、その行為者は一般の読者ではなく明善本人か、もしくは明善に近い人物(例えば先に見たような、鈴木信一などの財団関係者)であること

が推測される。この点からも、明善が記事の内容をチェックする役割を果たしていたと考えておきたい。

- (35) 『金原明善資料』下、三二〇—三二二頁。史料番号四五一。

(36) 河東碧梧桐は、一八七三(明治六)に松山市で生まれた。同郷の六歳年上である正岡子規に師事して俳句を学び、また一八九七(明治三〇)年に雑誌『ほととぎす』が創刊されると、高浜虚子とともに課題句の選者となって活動した。没年は一九三七(昭和一二)年。なお以上の記述は、『碧梧桐俳句集』(岩波書店、二〇一一年)所収の栗田靖「解説」を参照した。

- (37) 『金原明善資料』下、三二三頁。史料番号四五三。
- (38) 山崎延吉(一八七三(明治六)年—一九五四(昭和二九)年)は愛知県立農林学校(後の安城農林高等学校)の初代校長である。一八九七年に東京帝国大学農科大学農芸

科学科を卒業後、福島県蚕業学校や大阪府立農学校の教員を務め、一九〇一年愛知県立農林学校に赴任した。同校の校長を務める傍ら、愛知県農会の幹事や修養団愛知県支部の支部長などを務める。『農村自治の研究』などを著し、農業主義を主張した。なお以上の記述は、安城市教育委員会編『山崎延吉文庫目録』所収の「山崎延吉略伝」によった。

- (39) 一九〇九年五月六日付。(金原明善記念館所蔵、「揮毫関係書翰」史料番号五〇)。

(40) 一九一三年二月一四日付。(金原明善記念館所蔵、「揮毫関係書翰」史料番号三七四)。

(41) この時期に出版され、明善を模範的な「実業家」として捉えたメディアとして、山下久太郎著『静岡県名士列伝』(一八八四年刊行)や『実業家奇聞録』(実業之日本社、一九〇〇年)、『実業評論』(第一三号、一九〇〇年)などが挙げられる。

(42) 立身出世については、神島二郎『近代日本の精神構造』、岩波書店、一九五二年、見田宗介『現代日本の心情と論理』、筑摩書房、一九七一年、E・H・キンモンス前掲書、などを参照。

(43) 永谷健『富豪の時代 実業エリートと近代日本』、新曜社、二〇〇七年。

(44) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』、岩波書店、二〇〇九年。

(45) 明善自身が、具体的に如何なる思想を持ちながらこの「伝記編纂」事業に関わっていたかについては、現在のところ不明である。今後の課題としたい。

(46) 竹内前掲書、二〇七頁。

(47) 永嶺重敏『読書国民』の誕生』、日本エディタースク

ル出版部、二〇〇四年。

(48) 見城前掲書。

(49) 安丸良夫『文明化の経験 近代転換期の日本』、岩波書店、二〇〇七年。

(50) 「従五位金原明善願二依り位記返上ノ件」(国立公文書館所蔵マイクロフィルム、請求番号本館12A1018100・任A00189100)。

(51) 永谷前掲書。

(52) 岸本覚『褒められた人びと』、鳥取県、二〇一三年。

(53) 浜松市石像文化財調査会『浜松市石像文化財所在目録』、

浜松市教育委員会、二〇〇一年。

【付記】

本稿は、第八四回「書物・出版と社会変容」研究会(二〇一三年九月二八日、於一橋大学佐野書院)にて報告した内容に、一部修正を加えたものである。報告に際して、史料の閲覧及び公開を許可して下さった金原治山治水財団理事長金原利幸様はじめ、財団関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また当日、あるいは閉会後に貴重なご意見をくださったすべての皆さまに対し、心より感謝します。ありがとうございました。